針葉樹會報

通卷 第五十八號

夏山特輯

穗高涸澤合宿に就て

望月達夫

一、前書き

一橋山岳部に於てスキー合宿を除き登山の合宿生活なるものが實行せられてから未だ日は淺い。而して此の合宿の是非に關しては隨分論議せられたものであつた。が次に述べる樣な效果ある點に於て吾々は、現在合宿生活の意義を充分に認めるものであり、年に一度位は之を行なはなくては少なくも當山岳部に限り、部の存在理由が大半失はるゝものと迄考へて居る次第である。その效果とは(一)全部員が全時全處に登攀を目的として集合し、而も一目的の下に統制ある行動を採り得ること、(二)日毎異つた人々を以てパーテイを編成し登攀を行ふ故に、部員相互に山を對象としるに寄與するものである。「技術がどんなに上手であつてもそれだけでは登山者としての資格が成り立たないことも自ら理解されり廣大な天地を求める爲の準備である。登山のみならず何等の修練を經ずしてその道の蘊奧を極めんとする事は無謀に等しい。詳言すれば合宿は廣い意味では一登山者にとつて、あらゆる山々に於て夫々の個性を發見し味ひ得る準備と能力とを身につけする事即ち修練をなすことは何事かに對する準備である。今迄よる事と思ひます。併し又遂に、少しも技術を磨かずに、登山の眞隨に徹する事が出來ると考へるのも隨分無茶な考へ方と云へます。」と云ふ浦松氏の言葉が、明白に此の邊のことを言ひ表してゐる。狹い意味では近頃問題となつてゐる遠征(エキスペデイション)

に對して間接に貢獻するのである。

爰に一言して置かなければならぬ事は、今年は遇然にも涸澤へ吾々と全様な合宿形式をとつて早、慶の兩山岳部が入つたが、彼等にさつてはその目的が直接ヒマラヤを目指すにあると思はれるが吾々の計畫には何等かゝる直接目的はないと云ふことである。けれ共ヒマラヤと云はず所謂遠征に全然關心を持たぬ譯ではなく現在は時期未だ尚早と思ふが他日たとへ吾々が母校を去つた後であらうとも確らず其の期の到ることを疑はぬし、又機會を得るべく部員一同が努力すべきであるとさえ思ふ次第である。遠征のみが登山じやない。勿論そうだ。だからと云つて遠征を排撃すべき理由は毛頭ない。眞偽の程は知らないが、聞く處によれば來年は早大慶應、法政、京大等がヒマラヤに踏査隊乃至は遠征隊を送ると云ふ。ヒマラヤのみが山ではないとはよく言はれる言葉だ。成程その通りである。「併し苟くも山に因緣を持つからにはその世界で最も大物と云ふヒマラヤを一日望み見たいとか、その上に足を置き、その山々の間に生活して見たいと考へるのは無理のない事だらう。」と云ふ松方氏の言葉にうなづくのも決して不思議ではないのである。而かも本邦の山岳界の現狀からしてヒマラヤと云はず日本の山々よりもより大なる山に少しでも近づき得る登山團體は經濟的問題は第二として、技術的にも時間的にも少數の大學山岳部（O・Bをも含めた）以外にない事は衆知の事實だ。かゝる事から當然大學山岳部は自覺せざるを得ない。差迫つて遠征をやるかやらぬかは別問題としても機會あらば何時たりとも國を去り得る樣常に万全の努力をなし、一登山者としても又一團體としても貴重な經驗を積む必要があるであらう。その曉に於てたとへ遠征を行ひ得なくとも其等の努力と得たる經驗とは決して無駄なものとはならず、むしろ登山の本質にかけて重要なものであると固たく信ずるのである。

唯最後に省みなくてはならぬ事は、ヒマラヤ流行の波に乘り身の程も知らずに飛びだすのは未だ良いとして（經濟的問題がそうチヨックら飛び出せまいが）登山の本質を喪ろにする樣になつてはならぬ事である。遠征に關心を持つと同時に、此の方面も常に反省して登山の正道を步むべきで邪道に迷ひ込んではならぬ。將來少なくも一年に一ツ位の遠征隊がヒマラヤへ送らるゝ時が來、吾國の遠征が所謂板に着いて來た時こそ、遠征隊が本當の活躍の出來る時であらう。少なくとも吾々は現在から遠征に對する燃える樣な熱情と、登山の正道を一步もそれぬ冷靜なる心組を以つて進んで行かねばならない。

二、準　備

小谷部を中心にして今夏の各宿を目論みはじめたのは既に三月下旬からで、涸澤にし樣か劍澤にし樣かと、會へば必ず合宿の事に觸ると云ふ有樣であつた。五月に入り新入部員の顏振れも揃つて來ると具體的な問題として、全部員の前に現れて來たのである。場所は涸澤池ノ平と確定せられた。その理由は先づ費用が安いこと、それに荷物の運搬も比較的簡單であり、而も涸澤で解散して

も新入部員の如きさえ不安なく下山し得る等のこと、、今一つは矢張り穂高の岩場は優れたゲレンデであると云ふ事等である。かくして五月下旬から夏休に至る迄の週一回の定期集會には必ず何か涸澤に關した事、或は夏山一般、合宿の意義等に關した事が語られて來た。そして六月下旬には合宿の準備を完全になし、合宿そのものを理想的に行ふ爲、全部員にプリントを配布したのである。

天幕は例の大天幕、六人用天幕、二人用天幕（倉庫用）の三ツを設立する事にした。大天幕は一應修理改良し六人用の天幕と共にグランドシーツを作らせた。又大天幕の支柱を改め、直經三寸の丈夫なものとし棟木を加へた。涸澤池の平に大天幕が張れるかどうか、張れたとしてもカンフアタルプルにいくかどうかと云ふことはかなり議論せられた。實際に於ては小谷部、森川の努力の結果その一等地とも云ふべき島（呼稱）に好適の天幕地を求める事が出來た。

天幕の底部はグランドシーツの上に筵を三重位にひく事となした。

炊事其の他に用ふる燃料は一切石油を使用する事（用意の爲アルコールも携行したが）とした。之は涸澤では充分に薪木を集める事が困難なのと一つには冬期の準備（石油消費量の檢査及び石油コンロに慣るゝ事）との爲であつた。

運搬方法は天幕食糧其他大物の一般用品は國立より手荷物として（手荷物とする事は送料を極度に低廉にする）松本へ送り、松本よりトラックで上高地へ、更に人夫により一般用品の小部分と個人用品とを各自背負つて行くと云ふ段取りとなつた。が實際には松本上高地間の自動車不通（六月下旬の豪雨の爲）の爲に仕方なく德本を越える結果となつたが、之は最大の番くるはせであつた。

費用の方面は、準備金として參加員一人より五圓宛徵收し、食糧、人夫賃、其他此の中より支拂ふ樣豫算を組み、各員は汽車賃と少額の小使錢を持參すればいゝ樣にした。

準備中最も手數を要した荷物の荷造り、運搬方法に關し少し詳述す。（便宜上荷物一ヶ宛に番號を附す）

	品名	員數	
一	大天幕・大小シーツ・鐵ペッグ其他	八・四〇〇	（袋詰）
二	六人用・二人用天幕・支柱大小スコップ・ハンマー	八・五〇〇	（袋詰）
三	筵二十枚	六・九〇〇	
四	石油コンロ・ハーケン・カラビナ・ザイル三十米、三十米、二 鋸・鉈・槌・其他	七・〇〇〇	（箱詰）
五	副食物・器具（二幸の買物）	一二・〇〇〇	（箱詰）
六	野菜（二幸の買物）	九・五〇〇	（箱詰）
	合計	五二・三〇〇	

其他味噌二貫匁、石油一罐は西糸屋に命じて豫め上高地に荷揚げせしめた。

扨、七月六日新宿より（二幸で買物した爲）五と六とを三人分の手荷物として發送。七日一、二、三、四を四人分の手荷物として國立より發送。共に島々迄切荷を買ひ島々の西糸屋宛とした。（之は既に自動車不通の報に接し始めから德本越えの覺悟をした爲である。）九日朝島々に着きし小谷部は人夫五名を傭ひ一、二、三、五、六を上高地吉城屋迄上げ、大天幕等ほんの當座の必要品のみ小梨平にはこぶ。最初の豫定では小梨平へは全然はこばないのであつたが、横尾の橋が落ちた爲架橋せらるゝ迄二、三日は上高地に滯在せねばならなかつたからである。十日先發隊は人夫一名をして四及びバケツ、ヤカン等をかつがしめて上高地に入り之もて吉城屋に置く、かくして前記の荷物は全部上高地迄入つた譯である。

其他一般用品として先發隊、後發隊の受持つたものは次の通りである。

先發隊（中鍋、二・新石油コンロ・鉈二・醫油一升・藥品類）

後發隊（アルコールコンロ・アルコール四罐・コーヘル、三・筵十枚）

更に各員は個人用品として大略次のものを携行した。

食糧（白米三升・コンビーフ一罐・パン七回分・バタ或はジヤム相當量・角砂糖一箱・野菜少量・其他）

飯盒・水筒其他食器類、寢袋・衣類、ピツケル（アイゼン・ゾムメルシーは所有者のみ持參）

上高地より涸澤に至る運搬方法は「行動」にて述べる。尙參考迄に副食物、器具（五）・野菜（六）の内容を左に明記してをく。

五の中の副食物（佃煮三種・カレーの素一二一二皿分・ハヤシの素八〇皿分・メリケン粉・食鹽・海苔罐四・福神漬大一・砂糖十二斤・日東紅茶半封度・削節・味ノ素・高野豆腐・ワカメ・麩・味淋干二〇菓子五棟）

五の中の器具（大鍋二・汁用サヂ五・シヤモジ五・茶コシ二・タワシ三）

六の野菜（馬鈴薯・玉葱・茨隱元）

（個人携行の野菜はナス・キユウリ・キヤベツ・ニンジン等右と重複せぬ樣なもの少量なり）

三、行動

○合宿參加者　柿原謙一、小谷部全助、小林重吉、森脇芳之、望月達夫、和田榮達、森川眞三郎、鷲崎雄四郎、榎本直司、岩崎利一、原鐵三郎、新羅二郎、松浦靜雄、大塚武、日江井正己、齋藤明智、關根修、水田洋、宮城恭一、高橋廣三郎、里見治男

○自由參加者　林俊介

七月八日　半晴　荷物運搬の爲午後一〇・四五新宿發にて小谷部單身出發。望月、森川、新羅見送る

九日　雨　小谷部は島々西糸屋に至り既に到着せる荷物の大部分（四五貫三〇〇）を人夫五名を使用して上高地吉城屋迄運搬。西糸屋泊。島々西糸屋（八・〇〇）―鎗止（一二　〇〇―一・二〇）―徳本峠（四・〇〇）―五・〇〇）―上高地西糸屋（七・〇〇）

先發隊（望月、小林、和田、森川、鷲崎、榎本）夜新宿發。岩崎見送る。

十日　雨後晴　横尾の橋が何時かゝるか偵察に人夫一名派遣。更に夕刻同人夫に大天幕その他必要品を吉城屋より小梨平へ運ばせ假に大天幕を張る。

先發隊六名人夫一名を連れ上高地へ入る。島々西糸屋（九・三〇）―鎗止（一・三〇―二・〇〇）―徳本峠（四・三〇―五・〇〇）―上高地西糸屋（七・四〇）七名天幕泊り。

十一日　晴　上高地發（七・三〇）―一枚岩（一一・三〇―五〇）―前穂・奥穂鞍部（二・三〇）―涸澤池の平（四・〇〇）森川と二人で良好なる天幕地を得る爲六人用天幕を脊負つて登る。昨夏秣川が降つたと云ふので案内させた所、近道どころか飛んでもない所を降りて了ひ、本當なら卅分もかゝらぬ涸澤への降りで一時間半も藻掻いて了つた。池の平では通稱シマの最良地へ吾々の天幕を張る事が出來た。例年なら八月さなれば開かぬと云ふ直ぐ前の雪渓も雪崩の關係か今年は雪薄く既に開いて清冽な水が覗いて居る。

（小谷部）

後發隊（柿原、森脇、岩崎、原、齊藤、關根、水田、里見、宮城、高橋）新宿夜行にて出發。鷹野氏、林、佐々木の厚い見送りを受く。

十二日　快晴夕刻より曇後雨　涸澤の二人北尾根を經て上高地へ池の平天幕發（八・三〇）―北尾根五・六コル（九・三〇―五〇）―四・五コル（一〇・五〇）―四峯（一一・二〇―三〇）―三峯（一二・四〇―四五）―前穂高（一・〇〇―四五）―上高地（六・二〇　實驗的に昨日から携帶口糧だけで腹をごまかして來たが案外効力があつて、北尾根登行中もよく張切つた。

（小谷部）

上高地の五名食糧節約の結果二食。散歩等する。島々へ下る人夫へ後發隊への傳言を依頼す。

後發隊行動　島々西糸屋（九・三〇）―鎗止（三・〇〇―四・〇〇）―徳本峠小屋（七・〇〇）西糸屋にて先發よりの手紙を受取り各自荷を分担し徳本峠に向ふ。自動車不通の爲今夏は徳本を越す機會に惠まれた次第。荷重くして天氣佳し。

（柿原）

十三日　朝雨後晴　先發隊―涸澤行の豫定なりしも朝雨の爲斷念し、吉城屋の荷物を出來るだけ徳澤へ運搬する事とす。小梨平（一〇・三〇）―吉城屋（一一・三〇―四〇）―徳澤（一・〇〇）副食物、石油、野菜、米重なる食器類、其他一切の個人用品を運搬す。吉城屋にて往復共に後發隊に逢ふ。

後發隊―徳本峠（一〇・五〇）―白澤渡（一一・四〇―一・三

○上高地へ往復して吉城屋（四・〇〇）―徳澤小屋（五・〇〇）先發隊よりの手紙に基き今日中に徳澤迄行けば佳いと、ゆつくり出發。白澤渡にて先發隊の荷上げするに遭ふ。一年生に上高地を見せる爲河童橋へ往復し徳澤に入る。尚此の二泊共に米を提供し、味噌汁付として（但し寢具無）徳本四〇錢徳澤四五錢で濟む。（柿原）

十四日　晴　涸澤へ入る。小梨平（五・五〇）―徳澤（八・〇〇―四〇）―涸澤池の平（三・二〇）上高地の六名三時半起床。速に朝食をなし出發の準備をなす。約束の人夫（齋藤毅、他一名）來る。徳澤にて後發隊と合流し昨日運搬した荷物を廿一名にて適宜分擔す。平均七貫位の荷なり、ゆつくり涸澤に入り、過日六人用を張り置きし地に大天幕、其の周圍に六人用、二人用の二天幕を設立し、後者を倉庫用とす。物貨として運搬させたものは、大天幕一式、筵、ザイル等の箱、味噌、器具若干合計廿七貫八百匁である。

夕食七時半（ハヤシ・福神漬）紅茶、甘納豆

十五日　薄日後少雨、風　本日より合宿生活。

起床八時。九時半朝食（味噌汁、佃煮）。

○奥穂高岳　A班　柿原、森脇、松浦、大塚、日江井、齋藤、關根

B班　森脇、柿原、森川、高橋、里見、宮城、水田

C班　鷲崎、榎本、岩崎、原

天幕發（一〇・四〇）―穂高小屋（一・〇〇―二・〇〇）―奥穂高（一・三〇）―小屋（二・〇〇）―グリセード練習―天幕着（四・〇五）飛驒側よりのガス深く眺望絶無で始めて穂高の尾根を歩く一年生には氣の毒だつたが、皆張切つてくれた。（望月）

○涸澤槍側稜（小谷部、新羅、松浦、關根）

發（八・一〇）―側稜下（九・一〇―一〇・二〇）―晝食廿分―涸澤

槍頂上（〇・三〇）―小屋（一・〇〇―四五）―天幕着（二・一〇）涸澤槍からは大體二本の側稜が東に出てゐるが、吾々は下から見て右を登る。初心者向として面白からう。小規模だが二本の側稜間の壁が凄い樣だ。

（小谷部）

○前穗北尾根　A班（小林、岩崎、原）
　　B班（柿原、森脇、和田）

發（七・三五）―五・六峯のコル（八・四五）―四峯（一一・一五）―前穗（〇・〇五―四五）―奥穗（二・一〇―三〇・〇〇）―グリセードを練習しつゝ着（四・〇五）―小屋（二・三〇）此の日ザイルさばき二班全時に行動。霧深く、時々常念や梓川が霧の切間に見えて來る。

（柿原）

○ザヤンダルム　（鷲崎、榎本）

發（八・二〇）―穗高小屋―ザヤンダルム往復―天幕着（四・三〇）此の日ザヤンダルムは滿員。慶應の連中がザイルさばきの猛練習をして居た。

（鷲崎）

○ザヤンダルム飛驒尾根（森川、大塚、日江井）

發（七・一五）―小屋（九・〇〇―一〇・〇〇）―ザヤンタルム（〇・一〇―三〇）―飛驒尾根第二テラス（一・四〇）―第一テラス（二・二〇）―天幕着（三・〇〇）ひきかへす―第二テラス（三・〇〇）―ザヤンダルム（三・一〇―四〇）―小屋（八・一〇）―側稜下（九・二〇―四〇）―第一テラスにて朝からいやな雲行で腐る。兎に角穗高小屋迄行ってみやうと出發する。小屋では又誰かゞ奥穗高迄行こうと云ひ出した。頂上で晝飯を食つて居ると他のパーテイがザヤンの方へ行くのでつられて又歩き出した。其の中に飛驒側の霧が兎切れて白出や小鍋谷の出合の方迄見えて來た。飛驒尾根のあの剃ぎ落した東北面が人を惑き附る樣に迫つて來る。到々時間の許す限り降つて見る事にした。上下とも殆どリッヂ通りにルートを取つた。降りは二回程アップザイレンした。他にはザイルを用ひず。登りは第一テラス迄練習旁々アンザイレン。此處の岩は固く又ホールドも手頃で岩を少し始めた頃の連中に最

（森川）

十八日　晴時々ガスかゝる　全員行動す。

○北穗高、涸澤岳（鷲崎、榎本、水田、里見、高橋、宮城）

天幕發（八・二〇）―北穗高―涸澤岳―小屋―歸幕（五・二〇）

○涸澤槍側稜（森川、和田、岩崎、原）

發（八・一〇）―側稜下（九・二〇―四〇）―第一テラスにて側稜とのジヤンクション（一〇・一五―四五）―頂上縱走路（一二・〇〇）―北穗高小屋下雪渓を溪の下部にてグリセード練習。

（鷲崎）

○涸澤槍側稜（森川、和田、岩崎、原）

發（八・一〇）―側稜下（九・二〇―四〇）―第一テラスにてアンザイレン（一〇・〇〇）―左側稜登攀―右側稜とのジヤンクション（一〇・一五―四五）―頂上縱走路（一二・〇〇）―北穗高小屋下雪渓歸幕（一・二五）昨

日助サンのパーティが右側稜から登つたので今日は左側稜から登る。岩は相當脆いが思つた程ではない。規模は小さいがルートの採り方によつて相當面白く登れる。殊にジャンクションの邊りからリッヂ通り登ると一汗かくに充分の所がある。グリセードは例によつて快適。一番早く歸幕して大きなテントに四人でのさばる。

（森川）

○前穗北尾根（小谷部、大塚、齊藤、日江井）

發（八・一〇）—七峯（九・一〇）—六峯（一〇・三五—四八）—五峯（一〇—五〇）—五峯（一一・二〇—五五）—アンザイレン（〇・一〇）—四峯（一一・〇五—一一・三〇）—三峯（二・二三—二七）—前穗頂上（二・四二—四・〇五）—歸幕（五・〇〇）藪を堪能する爲下からやる。四峯からはザイル捌き練習の爲所謂縱走路を離れて登つた。

（小谷部）

○ヂャンダルム（柿原、新羅、松浦、關根）

發（八・二五）—小屋（一〇・一五—四〇）—奥穗（一一・〇〇—二〇）—ヂャンダルム（〇・一〇—一・一五）—小屋（二・二五—四・二〇）此の間柿原、新羅澁澤岳往復—歸幕（五・二〇）天氣は良かつたがガスがかゝつて展望は良くなかつた。ヂャンの上で飛驒尾根パーティと落合ふ。その他早大の連中等大勢集つて賑かだつた。歸りは小屋で一緒になつた一年生とグリセードの練習をする。

（新羅）

○ヂャンダルム飛驒尾根（望月、森脇、小林）

發（八・〇〇）—小屋（九・五〇—一〇・二〇）—ヂャンダルム（一一・〇五—三〇）—第三テラス（一・三〇）—第二テラス—第一テラス—ヂャン（四・〇〇）—小屋（五・二〇—四〇）—歸幕（六・一〇）白出を下つて取付いてみたかつたが霧深き爲一番普通の西側のルンゼを下る。他のパーティが登攀中で落石を顧慮し途中よりリッヂ通り下り第三テラス迄行き引返す。飛驒尾根にも既に明瞭な踏跡が出來た。尙前パーティの柿原はヂャン迄吾々と一緒なり。

（望月）

朝食、七時—味噌汁（玉葱、昆布）

夕食、六時半—カレー、佃煮、林檎、紅茶、菓子

十六日夜東京發、十七日德澤泊で林俊介本日午後二時半頃來幕

林檎、菓子、罐詰等澁山の土産物を持參す。

十九日　薄晴霧　全員行動す。

○本谷より北穗高（岩崎、原、齋藤、里見、水田、高橋、宮城）

發（七・三〇）—橫尾本谷出合（八・二五—三五）—大切戸よりの澤出合（九・〇〇—一〇）—カール底（一〇・四〇—五〇）—北穗最寄のザッテル（一一・二五—一二・〇〇）—北穗高（一・二〇—二・二〇）以下次のパーティと同じ。朝から香しからぬ天候で飛驒側からの濃い霧がすつかり垂れてゐて、常念の方は空が黃色くなつてゐると云ふ情けない有樣ではあつたが本谷は實に面白い登高ルートであつた。少し急な雪渓をアイゼンで登り切ればパッと開ける大切戸のカールは誰いふとなく別天地の樣な靜かさと嚴かさを抱いてゐた。北穗の頂上では各パ

ーテイが出合つて面白かつた。（岩崎）

○北穗高側稜（小林、柿原、望月）
發（一〇・〇〇）—北穗高澤の滝（一一・一〇）—側稜の末端へ出る（一二・〇〇）—北穗高（一・四五—二・二〇）以下前後のパーテイと同じ。滝の上の雪渓から側稜へ取付く處だけアンザイレン。リッヂは一ケ所少し面白い處があるだけであとは平凡。初心者にはいゝ處だらう。（望月）

○北穗高涸澤岳（林、森脇、和田、大塚、日江井）
發（一〇・二〇）—涸澤岩小屋（一〇・五五—一一・一〇）—北穗への小尾根下（〇・五〇—一・一五）—北穗高（一・四五—二・二〇）—涸澤岳のコル（三・三〇）大塚、日江井、齋藤歸幕（五・四〇）大塚　前のパーテイの連中等合計十二名涸澤岳は涸澤岳へ一涸澤とのコルより眞直ぐ歸幕（四・〇〇）

○前穗北尾根（鷲崎、榎本、新羅、松浦、關根）
發（八・三〇）—五・六のコル（九・二〇—一〇・〇〇）—四・五のコル（一〇・四〇）—三峯（〇・二〇）—前穗高（〇・五五—一・三五）—奥穗（三・〇〇）—歸幕（四・三〇）
朝空模樣が變だつたので五、六間のコルで長い間形勢を伺つた後晴れかゝつたのでゆつくり出掛ける。時々の落石に膽を冷す。三峯の上りが面白かつた。頂上の眺めは良くなかつた。奥穗迄の長かつた事。ザイルは全然用ひなかつた。（新羅）

○瀧谷第五尾根（小谷部、森川）
發（四・一〇）—小屋（五・四五—六・〇〇）—涸澤北穗コル（六・五〇—七・〇〇）—瀧谷Dルンゼを下る—第五尾根へ取付く（八・一〇）—涸澤北穗コル（九・五〇—一〇・〇〇）—涸澤の岩小屋でゆつくりノビて歸幕（四・〇〇）第四尾根かクラック尾根かを登る積りで早く出たが天氣が面白くないので簡單に第五を登る事とする。餘り規模が小さいので果して之が第五かどうか疑問に思つて居たが、廿二日に第四を登つた結果第五なる事がはつきりした。Dルンゼの少し上からリッヂに這入つたので取付きが一寸惡かつたゞけだ。（小谷部）

朝食、七時—味噌汁（麩、若布、高野豆腐）但し瀧谷班は別
夕食、六時—ハヤシ、佃煮、紅茶、菓子

二十日　快晴　本日合宿を解散す。下山せし者次の如し。里見、宮城、高橋（槍、燕縱走の爲）林、岩崎、原（上高地へ）關根（歸京）新羅（常念へ）他は天幕に殘る。八名去ると急に淋しくなつた樣だ。日一日と雪もへり天幕の直ぐ前の池にうつる空の色も青さを增して來る。

○前穗北尾根（柿原、森川）
發（一一・二〇）—三、四のコル（〇・二五—一・〇〇）—前穗（二・二五—四〇）—奥穗（四・五〇—五・一〇）—小屋（五・四〇—六・〇〇）—歸幕（六・三〇）朝からいゝ天氣、今日は休養日だつたがあんまり天氣がいゝし謙ちやんが寫眞を撮りに行こうと云ふので空身でのんびりと出掛けた。奥又白の谷は美しい。南も八ツも御岳も皆見えた。北は針の木から鹿島槍

烏帽子、野口五郎、鷲羽、蓮華の山波が延々と連つて居た。そして其の彼方に浮ぶ雲の峯はそれにも増して美事なものであつた。樂しい夏の合宿も今日が最後だ。一生忘れる事の無い懐しい涸澤の合宿。今日そのこよなきフイナーレであつた。（森川）

○涸澤岳奥穂高（大塚）

發（八・三〇）—小屋（一〇・三〇）—涸澤岳西尾根（一一・二〇—五〇）—小屋（一一・〇〇）—涸澤岳奥穂（一・〇〇—一〇）—前穂へ少し行きかけて戻る—奥穂（二・三〇）—小屋（三・〇〇）—涸澤岩小屋（三・二〇—四・三〇）—小屋（三・三〇）—歸幕（五・〇〇）久し振りの快晴に寫眞をとりに登る。

森脇、和田、榎本は展望と煙草補給の目的で小屋へ。前二者涸澤岳迄至る。望月、鷲崎、日江井、水田の四名は涸澤の岩小屋へ行き上のテラスで峯と雲の流れを見乍ら半日すごす。小谷部、小林、松浦、齋藤は天幕の周圍にて晝寢。尙昨日午後來幕した奥原守は兩方の都合により本日上高地へ下る。六人用天幕其他器具若干持參せしむ。

朝食、七時—味噌汁（玉葱、若布、麩）夕食、六時—ハヤシ、佃煮、紅茶、菓子

（合宿は本日解散したのであるが、涸澤の天幕を引拂ふ迄便宜上記す。）

廿一日　快晴　本日下山者次の如し。横尾本谷より大切戸を經て槍へ向ひし者（柿原、森脇、小林、和田、榎本、松浦）上高地へ下りし者（鷲崎、大塚、日江井、齋藤）合計十名。上高地へ下りし者に二人用天幕、筵若干持たせる。之で今日から此の大天幕にたつた四人さはいさゝか淋しい。だが夜は悠々寢られる天幕に殘つた四名少し整理等をして餘りの良いお天氣に午後から出掛ける。

○北尾根三峯の壁（小谷部、森川、望月）

發（〇・二〇）—三峯の壁下（一・三〇—四〇）—登攀—二・三峯のコル（三・〇〇）—前穂高（三・〇七—三〇）—歸幕（四・一〇）三峯の壁は北尾根縱走者の多い時は落石の危險があるから朝早くか午後がいゝ。案外惡場はない。けれ共下から三分の二位は岩も固いし涸澤附近では面白い處の一つである。オーダーは小谷部、森川、望月。快晴の日の岩登りは全く快適である

（望月）

○奥穂高（水田）

發（〇・二〇）—小屋（一・四〇）—頂上（二・三〇—三・一〇）—小屋（三・三〇—五〇）—歸幕（四・三〇）前穂迄行かうかと思つたが直接の下り道を知らず、長い道を又もどるには時間がなさそうなので止る。快晴だつたのでゆつくり遠近の山々を見物。

廿二日　晴夕立

○瀧谷第四尾根（小谷部、望月、森川）

發（五・五〇）—北穂涸澤コル（七・二〇—三〇）—Dルンゼを下る—D・Cルンゼ出合（八・五〇—九・〇五）—Cルンゼ

の瀧（九・二〇―四〇）―第四尾根に取付きアンザイレン（一一・三〇）―ツルム（二・〇〇）―縦走路（二・五五）―北穂高（三・一五―四五）―雨宿りし乍ら北穂高澤より歸幕（五・三〇）Cルンゼの瀧の少し上から右上に見える岩峯を登るべく草付きをリッヂに出たが手がつかないので敬遠して普通のルートを取り、Cルンゼを第二コル迄登る。途中巨大な落石あり。膽をつぶす。ザイルオーダーは森川、望月、小谷部の順。思つたより規模は小さかつたが面白く岩を樂しめた。途中下手な打ち方をしたピトンが隨處にあつたので登攀者の危險を憂へて一々抜いて來た。縦走路から望月は北穂澗澤のコルへ（夕立をやましつゝ、歸幕四・三〇）小谷部、森川は北穂頂上へと向ふ頂上で夕立に遇ひコンケーブした岩陰に避難す。（小谷部）

○奥穂高前穂高（水田）

發（六・一〇）―小屋（七・四〇）―奥穂（八・一〇―三五）―前穂（一〇・四五―一一・二〇）―前穂下の雪渓（一・二〇）―歸幕（〇・三〇）朝霧の上に浮ぶ山々の雪が紅に映えてゐた明日はもう下るので歸りは充分に滑り且つころがつて雪だらけになつた。

廿三日　薄日後雨　小谷部、森川瀧谷へ向つたが天氣惡化の徴ありし爲もどる。望月、水田澗澤を後にして上高地へ。發（九・〇〇）―本谷出合（一〇・〇〇）―横尾（一一・〇〇―三〇）―徳澤（〇・三〇―一・〇〇）―上高地（二・三〇）大天幕は明日下す豫定であつたが人夫の都合つきたる爲全部澗澤をひき上げる。發（一二・二〇）―第四尾根に取付きアンザイレン（一一・三〇）―ツルム（二・〇〇）―縦走路（二・五五）―北穂高（三・一五―四五）―雨宿りし乍ら北穂高澤より歸幕（五・三〇）Cルンゼの瀧の少し上から右上に見える岩峯を登るべく草付きをリッヂに出たが手がつかないので敬遠して普通のルートを取り、Cルンゼを第二コル迄登る。途中巨大な落石あり。膽をつぶす。ザイルオーダーは森川、望月、小谷部の順。思つたより規模は小さかつたが面白く岩を樂しめた。途中下手な打ち方をしたピトンが隨處にあつたので登攀者の危險を憂へて一々抜いて來た。縦走路から望月は北穂澗澤のコルへ（夕立をやましつゝ、歸幕四・三〇）小谷部、森川は北穂頂上へと向ふ頂上で夕立に遇ひコンケーブした岩陰に避難す。（小谷部）

○奥穂高前穂高（水田）

發（六・一〇）―小屋（七・四〇）―奥穂（八・一〇―三五）―前穂（一〇・四五―一一・二〇）―前穂下の雪渓（一・二〇）―歸幕（〇・三〇）朝霧の上に浮ぶ山々の雪が紅に映えてゐた明日はもう下るので歸りは充分に滑り且つころがつて雪だらけになつた。

廿三日　薄日後雨　小谷部、森川瀧谷へ向つたが天氣惡化の徴ありし爲もどる。望月、水田澗澤を後にして上高地へ。發（九・〇〇）―本谷出合（一〇・〇〇）―横尾（一一・〇〇―三〇）―徳澤（〇・三〇―一・〇〇）―上高地（二・三〇）大天幕は明日下す豫定であつたが人夫の都合つきたる爲全部澗澤をひき上げる。發（一二・二〇）―徳澤（三・二〇―四・〇〇）―上高地（六・二〇）人夫二名には大天幕一式、石油殘り、殘留食糧其他器具類合計一九貫二百匁をかつがせた。

（合宿責任者　小谷部　記錄掛　望月）

四、後　書　き

從來の夏季合宿は始めに各方面の縦走等を行つて然る後一ケ所に集ると云ふやり方であつたが、それでは統制がとれず氣分も幾分だれ氣味になるので、今年は之を逆にして先づ何はさまれ全部員が一ケ所に同時に集り一定期間皆で統制ある行動を爲し、解散后は全然自由行動と云ふ事にしたが果して結果は非常に良好であつた。殊に社會意識の覺醒とその實踐に對してはかゝる合宿ならでは得られぬ良き修練を行ひ得たと思ふ。個人の素質を向上せしむる傍ら、かゝる機會を利用して所謂チームワークの訓練を爲す事は今後の合宿で大いに心掛くべき事であらう。而してゆくゆくは卒業眞近き者及び初心者を除く中堅所は、特別班としてより高峻遠隔の地、より一層進んだ形式で合宿を行ふ樣にしたいものである。

既に重なる事は書き終えたのであるが、次に準備等に就き結果から見て一言附加へて置き度い。

大天幕の支柱を丈夫にさせた事は非常によく、その爲少しの不安もなかつた。只十六日夜の風で大天幕のフライが少し破損し、後フライは使用しなかつた。從來のフライは風に對して不利なる故内部で二重屋根にした方がいゝと思ふ。此の點冬期用天幕と思ひ

合せ充分研究の餘地があらう。底に厚手のグランドシーツと筵を用ひた事は合宿を非常にカンファタブルならしめた。燃料として石油を用ひた事も成功の一つ。手がかゝらぬから人夫は不用で始め奥原守を雇ふ豫定であつたがこの爲に、又守の都合もあり雇はなかつた。石油の量は極く少量でいゝ事がわかつた。一罐上げて充分に使用し尚半分を餘した。石油コンロ（ラデイウス）は二臺であつたが廿一名の人數では少なくもう一臺はほしかつた。又石油ランプは携行しなかつたが石油を使用する時はローソクよりもランプの方がいゝ。

荷物の運搬方法も大體豫定通りうまくいつた。但し荷造りはもう一歩突込んで考へなければいけないと思ふ。即ち現地で解體しあれこれと又荷造りをしない樣に始めから先の事迄考へてかゝらねば駄目である。冬には特に此の事が大切である。

更に『物貨』の運賃につき一言する。『物貨』の相場は左の通りである。

一、島々―徳本峠―上高地　一貫目　四十錢
二、上高地―涸澤　〃　三十錢
三、涸澤―上高地　〃　廿五錢

併乍今年は人夫拂底し二は三十五錢三は卅錢に騰貴して居たが交渉の結果例年通りの賃銀になし得た。尤も涸澤―上高地は歸路の人夫を使用したのであるが。荷物運搬に當つては『物貨』と明示し賃銀貫匁をはつきり決めてなく事が大切で、さもないと普通日當及び泊代食費を請求される慮れあり。尤も日本アルプス案内人組合の規定に携帯荷物五貫匁以内とし案内を主とせるもの故明らかに荷物運搬に『日當』を請求するのは不當なのであるから強硬に頑張るべきである。『物貨』の場合は只貫當りの運賃のみ支拂へばよい。

其の他の細かい事に關しては最早や記す事はない。一人の負傷者も出さず而も非常に充實した合宿の行へた事は全部員が張切つてこの合宿の爲全力を傾注した結果である。

最後に徳澤及び上高地へ殘して來た器具、食糧を明記し且合宿會計報告を記す。

○徳澤小屋＝（筵十八枚）
○上高地西糸屋＝（大天幕、支柱、グランドシーツ等）

器具（大鍋一、小藥罐一、大バケツ一、中鍋一、しやもぢ五、汁すくひ四、茶こし一、たはし二）
食糧（コンビーフ一、ウナギ罐一、カレーの素四、ハヤシの素二、海苔罐一、角砂糖二、砂糖一斤、若布二束、高野豆腐一袋、メリケン粉、紅茶、共に少量、味の素）

（責任者　小谷部）

○涸澤合宿會計報告

収入之部

參加者支出廿一名（一人當り、五・〇〇）	一〇五・〇〇
部費ヨリ（夏山補助トシテ）	一五・〇〇
部費ヨリ（器具購入代トシテ）	八・〇〇
米一斗補給廿一名分（一人當リ〇・二〇）	四・二〇

雜收入（殘品一部販賣）	五〇
入幕金一名分（林）	一・〇〇
合計	一三三・七〇
支出之部	
食糧品代	三五・六八
燃料代	四・八二
藥品類	一・四五
諸器具	八・〇五
諸雜費	四・〇八
手荷物配達料（六件）	六〇
茶代	三・八〇
「物貨」運賃	三八・五〇
奥原守使用二日分	六・〇〇
數板借料（上高地）	一・二〇
交通費	一・三八
參加者廿一名へ拂戻し	二八・一四
合計	一三三・七〇

（附記）此の報告は小谷部と合作する豫定であつたが同君が先輩と藥師の方へ行き始終會ふ譯にも行かず、大體の相談だけで僕が筆を取つて同君に目を通してもらつた。至らぬ處は何卒御諒承下さい。

（一九三六・八・二八）

涸澤生活に歌ふ

柿原謙一

住き涸澤の天幕生活に醉ひし山男のいさも無粋なるみそひさもじ十二首

徳本の峠のほとり奥山木（みやまぎ）に郭公鳴きて霧深くこめぬ

梓川清く流れて徳澤の牧舍に仰ぐ北尾根の峯

偃松の間を縫ひて夏徑は細く續けり涸澤の谷に

偃松と山あぢさいのかつ茂る涸澤谷に天幕を張りぬ

あゝ穂高なれを慕ひて涸澤のやまぶどころに辿り來し身ぞ

一日の雨にいたみし北尾根の巖の狹間（あい）に岩かゞみ咲きぬ

前穂高降りて來れば偃松の中には白き石楠花の笑む

涸澤のカールの底に部歌響き澄みたる空に星くずの散る

一日のザイルさばきに疲れたる身にいこはしも天幕の夜

いかつけき穂高の巖登り來てかへりみすれば槍高く立つ

葉がくれに奥穂の岳を見返りつ涸澤谷を降り初めけり

美麗しきキレツト澤の雪渓のいわなの上に山友は腹ばふ

槍、穂高、平湯廻り　　スロモ

大阪へ來て早くも四ヶ月は過ぎました。大阪と云へば山でよく惱まされる、關西辯やら、汚いごちや〳〵した所なので厭でしたが、來て見れば然程でもなしです。其上ホースケ氏が隣室に居て大變親切で、優しくて、よく奢つてくれるので大助りです。彼の又の名は「夜店の源ちやん」中島君等呼ぶ人は少いです。春は落着かず到頭出掛けませんでした。六月末凡兒が當地に雨雲を齎らしました。彼の來る迄は空梅雨でカン〳〵照りでしたが滯阪五日間、降りも降つたり、お天道樣は仰がれなかつたです。或夜遲くなつて突然歸支度を始めた彼を、私は引留ませんでした。雨も厭になつたからです。翌日はお蔭で大阪には珍しい快晴が、約束された樣に訪れました。賢明なる諸氏には思ひ當る事があるでせうが、實際氣をもませる天氣だ。河童橋で三人に別れ、二人淋しくフラリ〳〵と德澤へ行く。增築して木の香新しい德澤小屋は、仲々感じがよい。前穗の見える、疊も數いてない新しい部屋に通されて、喜んだのも束の間、名古屋の女學生の一隊が隣りに陣取つて三時頃からヲー〳〵キヤー〳〵五時頃迄惱まされ、仕方がないので起きて六時半には淸しい快晴に、靜かな牧場の中を「矢張此處迄來る丈でもいゝれ」と言ひ乍ら槍に向つてゐた。一の俣、槍澤小屋は何時の間にか過ぎ、飮む度に水が冷たくなるが、矢張り汗が出て暑い事に變りない。殺生二時、早過ぎるがガスが濃いので大槍も止め、混みさうな殺生を後に肩まで登つたら、此處も混むさうな。肩の夕食はカレーと相場が決つてゐるらしい。一枚の蒲團にギュー〳〵四人も詰められて肩に蒲團がなくて寒いなんて、男だと思つたら、何だ森川だつた。「ヤー」と言ふと「ヤーよく來ましたれ」と大して嬉しさうな顏もしないで言ふ。天候惡化の爲め、もう下山するとか、當にして來たので聊かがつかりした。西糸屋に行くと、ゐるは〳〵、汚いのや物凄いオツサンが。心臟の弱い僕は恐しくなつた位だ。型通り仁義を濟ますと「皆學校を出たらスマートになつたれ」と僕等をジロ〳〵見ながら言ふ。冗談言つちやいけない、自分達の汚いのに氣が付かないらしい。涸澤の合宿の大成功を收めた話を聞いたり、大阪をこき下したりしてゐると、別れるのが厭になる。今日は肩迄伸す豫定が、雨は降る時間は遲いで德澤泊と決めたら、のんびりして皆を送り出した後、森脇、和田等と上高地をブラ〳〵ホテル迄歩く。降つたり照つたり、實際氣をもませる天氣だ。河童橋で三人に別れ、二人淋しくフラリ〳〵と德澤へ行く。增築して木の香新しい德澤小屋は、仲々感じがよい。前穗の見える、疊も數いてない新しい部屋に通されて、喜んだのも束の間、名古屋の女學生の一隊が隣りに陣取つて三時頃からヲー〳〵キヤー〳〵五時頃迄惱まされ、仕方がないので起きて六時半には淸しい快晴に、靜かな牧場の中を「矢張此處迄來る丈でもいゝれ」と言ひ乍ら槍に向つてゐた。一の俣、槍澤小屋は何時の間にか過ぎ、飮む度に水が冷たくなるが、矢張り汗が出て暑い事に變りない。殺生二時、早過ぎるがガスが濃いので大槍も止め、混みさうな殺生を後に肩まで登つたら、此處も混むさうな。肩の夕食はカレーと相場が決つてゐるらしい。一枚の蒲團にギュー〳〵四人も詰められて肩に蒲團がなくて寒いなんて、

隣で駄洒落を言つてゐるのを聞いて、下には下があるなと安心した次第です。

夜半ザアーと來た。明方は風が強かつた。明けて廿六日、一番先きに飯を食つて五時過ぎに飛び出した。凉しいので中岳迄ノンストップ。中岳のコルで水筒に冷水を詰め乍ら「此れ丈けの水を大阪で賣つたら、儲かるだらうなあ」と源ちやんが云ふ。大阪に一年も居ると、上高地、平湯廻遊切符を買つたので、今日中に平湯まで伸したいと思ふと仲々忙しい。二、三のパーテイに會つたきり、雲もないいゝ御天氣であの山、この谷を賞美し乍ら靜かな尾根を辿る氣持は又格別だ。北穗の邊で飯にして、バイ鑵を開けたら、動き度くなかつたが、さう言ふ譯にも行かぬ。瀧谷に物凄い落石ある、道を急いで穗高小屋十二時半、泊れるらしい。又バイ鑵を開けてゐると十二、三人ぞろ〳〵奥穗へ行く。リーダーらしいのが時々豆腐屋のラッパ見たいのを鳴らしたり、どなつたりしてゐる。もう登るのも飽きたし、上高地七時近くの最終のバスを摑へれば、夜道してゞも平湯へ着けさうなので涸澤を下る事にする。ピッケルもなし、オッかないので小屋から雪渓は御免を蒙り尾根道を途中から滑る。ガラ〳〵した彼方、此方ウロ〳〵してゐる中に時間が經つて横尾の林道を馳ける樣に下つた。源ちやんは足の傷が痛むと言ふし、僕は年の故か足の裏が痛く、梓川が見えた時はホッとしたものだ。もうどうしても間に合はない事が分ると馬鹿にへばつて德澤に着いたら二人で顏を合せて、どうせだめなら上高地より此處の方が感じよい、と言ふ結論を生んで御輿を据えてしまつた。山も終つたてんで、乾杯したら、他愛なく醉拂つて、石ころの樣に眠つてしまつた。

明けて廿七日、平湯泊りの豫定が中の湯、上高地、德澤となつた爲に、朝つばらからエッチキ〳〵、歩かされ、河童橋で危くバスに遲れる所だつた。昨日に勝る快晴、靜かな燒の煙がつく〴〵情ない。中の湯でバスを捨てる。安房峠は登りより平地の方が長い位でバス道路は半分ぐらいしか出來てゐず、もう二年ぐらいはかゝるそうな。平湯十一時。一時の高山行バスに乘る爲溫泉も晝食も大急ぎでやる。源ちやんが女中にヨードチ幾と繃帶を賴んでやつたら、沃度丁幾は無いとの事。困つたと云ふと「ヨヂユウム丁幾ぢやいけないんですか」といふのには二の句が次げなかつた。飯を流し込んで支度をしてゐると、女將が僕のキスリングを見て「これはいゝもんだにやあ。リュックよりは餘程たんと入りそうだにやあ」には又もやダアとなつた。

バスは平湯峠を越えて高山迄二時間、乘鞍を背後に、白山の眺めを遙か前方に恣にし乍ら、九十九折の險道を縫ふ。綠の山、谷牧場、鄙びた飛驒訛り……短かつたが愉快な山旅の最後を飾るに適はしいドライブだ。バスも暑いので疲れるらしく、時々水を打つかける。運ちやんが又至極のんびりしてゐて、客にガソリンの臭を嗅がせ乍ら、サイダーを冷して呑んでやがる。三時過高山の町に入る。小京都と言はれる丈けあつて、こぢんまりした立派な街だ。勤め人の悲しさ、此處でものんびり出來ず、せめて高山

線で氣をよくしてやらうと思つたら、御嶽歸りの六根清淨共がワンサ乘込んで來て、鈴の音で眠氣が一時に覺めてしまつた。

高谷、藥師、藥師澤、黒部上流を經て槍

神河内に至る　　クマ

今度も三人だが近ちやんの代りに小谷部が一枚加はつて、一年振りの夏の北アルプス。近ちやんは二世の病氣と御本人の食過ぎによる胃酸過多症さいふやつで、遂に參加出來ず非常に殘念であつたらうと思ふ。尤もこれは六千萬圓の問題があつて、此の方の原因による口惜しさの方が大きかつたかも知れないが。然し近ちやんよ安心して吳れ、岩井谷五光岩は君の爲め遠慮して探査の手は延ばさなかつたかられ。

助さんの十二貫は特別として、ペン公も俺も八貫の荷物には相當アゴを出した。家を出る時は足許がふらついてこれで一體山に登れるかしらと思つた位だつたが、其處は昔とつたキネヅカとでもいふのか、どうやら人間並に歩けたのは不思議であつた。

編輯氏の御註文によりいつものダラ〳〵報告はやめにして極くアッサリと責任を果して置かうと思ふ。

第一日は富山からセメン小屋、こんな小屋は誰も知るまい。直江津邊りでは雨が降つてゐたが滑川附近に來て陽が出て來、千垣からガソリンカーに乘せて貰ふ頃には夏らしい陽ざしがカン〳〵照りつけてゐた。然るに鬼ケ城の長いトンネルを出る頃になつて空模樣が怪しくなり、遂に雨がやつて來た。小谷部の顏を見たら蛙の頭にションベンをひつかけた時の樣に無責任なツラ構へ。これは小谷部のせいではなくて不連續線の爲だ相だ。

地圖の間違ひに氣がつかず少し立山溫泉の方へ曲つて行つたら人が居たので樣子をきくと、眞川へ這入るには五六町戻つてセメン小屋の下から大きな釣橋を渡るんだとの事で、ドシヤ降りの雨の中をスゴ〳〵と引歸す。

此の分ぢあとてもの事に濡れる許りなので、二時だといふのに此のセメン小屋に一晩御厄介になる事にきめて了つた。小屋と云つたつて屋根がスコシついてゐるだけだつた。

第二日は八月の十七日だ。此の日は釣橋から眞川の左岸につけられた電力の道に從つてスゴ谷出合の取入口でおしまひ。此の小屋の子供達無慮七八人。釣橋やダムのコンクリートの壁の上でゴッコをやつてゐる。見てゐる方がハラ〳〵する。親達は眼が離せないと云つてゐるが、あの位離してゐりや澤山だ。三つ位の女の子が釣橋の眞中で針金を持つて橋をゆすつてゐる。兎に角大したものだ。

第三日目は小屋の人に途中まで來て貰ふ事にして六時頃出發、眞川の川通し行くのだ。ヒバリと云ふ惡場があつた。高廻りが二回。餘り氣持ちのいゝ所ではない。來て吳れた人は歩き乍ら岩魚を釣る。達者なものだ。暫くの內に五六匹釣り上げた。其の人は此の方が面白くなつたか、箱瀧へ行かぬ內に歸つて了つた。

此の瀧は立派な瀧である。左を搦んで上に出てからオヘッ位の渡渉をやつて對岸に眞川の本流の出合ふノゾカズといふ見事な壁

を見て岩井谷に這入る。岩井谷も所々に素晴しい瀧がある。此の日は岩井谷蔦谷合流點の少し下流、ガレの臺地の上にテントをはる事にした。

第四日、テントを出ると藥師が谷奥に見上げる樣な高さに頂稜を左右に引いてゐた。隨分高けえなあと感心する。今日こそはあの上に出られるだろうとテントをたゝんで又谷通し歩いて行く。瀧あり殘雪あり、その殘雪が地ひゞき立てゝ落ちたり、濕れた岩から滑り落ちたりして、兎に角藥師の頂上から眞下に見える平に出て來た。藥師に抱かれた桃源境だ。へばつた身體にはあの長い登りは隨分こたへた。でも到々目的の大半を達して無事二九二六米突の峯頂に辿りつく事が出來た。

遠望は利かぬが歩いてる所だけはいつも天氣、靈驗あらたかといふか、神の如しといふか、兎に角適當に天氣を按配する、一寸他人では眞似の出來ない神業であろう。

此の日は藥師澤中俣の何とかヶ原に野營、水晶の東尾根が丁度劍の八峯のやうに雲の平の左上に見える。

豫定の日が大分迫つて來た。明日は双六か槍まで頑張り、次の日は神河内から松本へ出なければならぬ。歩く距離は段々長くなる。弱音を吐くやうだがもう吾々の年になると重い荷を脊負つて長い距離を七日も歩くのは無理なやうな氣がする。

第五日目だ。黒部の上流を渡渉したり高廻りして赤城澤を横切り、日本平を通り、五戸澤を右に見て暫く行くと、左から平の上で道がある。蓮華の小屋に五時についたが双六まで行かねばならぬので小憩の後出發、蓮華双六を攀んでゐる内に日が暮れて双六小屋についたのは八時廿分、眞暗な御陵で上にいゝ小屋があるのも氣がつかず、その儘モグラと同居で一夜を明かす。

第六日目は槍から槍澤を一氣に下り、夜の七時に西糸屋に着いた。小谷部が入つてつたら西糸屋の連中皆御挨拶に參列。てえしたものだ。

（一一・八・三〇）

山岳部報告（七月）

記錄

(1)三峠岩登練習（七・四）岩崎、原
(2)穗高涸澤合宿（詳細別記參照せられ度し）
(3)涸澤—大瀧山—常念岳—松本（七・二〇—二三）新羅 他一名
(4)涸澤—槍澤—槍—燕—中房（七・二〇—二三）里見 高橋 宮城
(5)涸澤—橫尾本谷—南岳—槍—燕—中房（七・二〇—二二）
榎本 杉浦
(6)涸澤—本谷—槍—烏帽子—大町（七・二一—二四）柿原
(7)涸澤—本谷—槍（東フェース登攀）—槍平—槍見溫泉—上高地（七・二一—二三）小林 森脇 和田
(8)上高地—明神岳—前穗（七・二一）岩崎 原
(9)上高地—天狗岩登攀（七・二二）大塚 日江井 齊藤
(10)上高地—燒岳（七・二五）水田
(11)上高地—大瀧山—蝶ケ岳—松本（七・二六—二七）水田

(12)八ヶ岳（七・二八―三一）水田　他六名

日誌

○定期部員集會　七月三日（金）於國立部室
　出席部員（本科六名　豫科三名　專門部三名）
　洞澤合宿の先發、後發隊を確定し、責任者、記錄掛等を定む。
○夏山最終準備會　七月七日（火）於國立部室
　出席部員（本科十名　豫科九名　專門部一名）
　午過ぎ合宿の荷物全部發送し終る。細部の點に關し万端打合せをなす。

記錄

○惠那山（七月十二日）　村尾金二
　詳細は前號を參照せられたし。
○早戸川を遡る（八月九日）　久保田禮治
　輕裝で日歸りの山に出た處豪雨に叩かれ臍まで濡れて逃歸る。
○日光湯元溫泉（八月二十八日―三十日）　小柳二郎
　山へは登らず、金精峠に行てみる。
奥野綱重氏歡迎會　八月十二日　於元園軒
　片や株式會社帶廣運送社專務取締役奥野綱重氏、片や日本郵船株式會社南洋航路橫濱丸乘組鷹野雄一氏。南北、老若、海陸、と面白い對照をなす同業の兩酒豪を迎へて、ビールに暑氣を吹飛さうといふ目論見は何かの勘違ひで、此の日橫濱丸は南洋に向て航行中だつたさうだ。奥野氏は重役になつた爲か顏は白くなり髯の形が少し變つたが、相變らずの廣いゲレンデのあたりから大きな聲を出して北海道の生活を禮讃する。此の週末からクマ、ペン、スケの三氏が岩井谷から藥師に行く。そうしたら佐々成政の埋めた五十萬兩を探して貰はうちあないか。見附つたら奥野專務を辭職させて社長に祭上げ、纘山師コンチャンを技師長に傭つて、針葉樹會〇〇會社を作つて大儲けをしやうなんて話になつて、飛んだ所で暑さを忘れてしまつた。中川氏のねなかつたのは勿怪の幸、もしゐたら、資本金八億圓、拾割配當位まで進展したに違ひない。流石の主賓も顏負けの體で『相變らずだなあ』つてな顏をしてゐた。
○訂正　前號所載「一橋山岳部昭和十一年度豫算表」收入の部の內「本科會補助金　三〇〇・〇〇」とあるは「五〇〇・〇〇」の誤尙左の一行脫落に就き、訂正增補します。

大學會計補助金	三〇〇・〇〇

幹事から

本號は會員、部員諸君の熱意と御寄附により、大變豐富な內容を盛る事が出來ました。尙山岳部報告の內『日誌』の一部は都合に依り次號に廻します。
本會々費は左記振替貯金口座へ拂込むのが最も便利であります本年度迄の未納者はせいぐ早く御拂込願ひます。

東京八二六三番　鈴木三榮株式會社內　小柳二郎